

# 國井修先生の話

## ●エボラ出血熱の調査

「シユバイツァーが、赴いたかの地、アフリカ・ガボンでは、へエボラ出血熱の調査もやりました」

「そりゃあ、こわいですよ。エボラ患者を診たのは、日本で初めてかもしれない。

新興感染症対策の研究に行つた者が、日本に持ち込んだら、シャレにならないもんね。

熱帯雨林の乱開発などで、人間と自然の調和が崩れてきてね。

エボラは、そんな人類への自然からの逆襲と言つてもいいだろうね。

エボラを含めて、20年間で、世界中で30以上の新しい感染症が出ているのです」

「ところが、今、ひとつの病氣(ポリオ)を撲滅するために、何十億円、恐らく世界中では百億円以上の開発費がかかるのです。

中南米からはなくなつたが、今は、アジア大陸からなくそう、中国雲南省、ベトナムなどからなくそうと、必死になつていっているのです。

でも、何年かかつてもなくならない。そのうちにまた、新しい病氣がどんどん増えてくる。まるで、私たちごっこです」

●ペルーの大使公邸人質事件（医療班の責任者でした）

「ペルーの大使公邸人質事件の、強行突入の前後1カ月行っていました。

ペルーの時は、さすがにカラオケでできなかったですね。

政府から派遣された医師団ですので、プレスからいろいろ聞かれるわけです。

現地でマニユアルを作っているんですね。

全員殺された場合、負傷者が出た場合、どこの病院に収容して、どのぐらい点滴、血液が必要か、血液も、現地の人の血液ですから、B型肝炎とか、エイズ(HIV)が入っていないかとか、全部調べているわけです」

(ここから、月刊地域医学より抜粋)

「我々は、日本政府側なので、いろんな意味で大使館には入れないのです。そこで、ICRCという国際赤十字委員会のメンバーが、中に入って診察して、得た情報をもとにします。

慢性疾患を持つ人質には、ICRCに薬を委託して渡してもらいます。食事内容を全部チェックして、栄養が片寄らないかを検討します。

また、保健医療面での、人質の家族とか企業の人達への説明など。

あのときは、

「平和的解決」と、「強行突破」と、いう二つのシナリオがありました。

「平和的解決の場合」

「全員がその場で解放されるシナリオ」

「何人か解放されて、飛行場まで連れて行かれるシナリオ」

「その後、キューバなど第三国に行くまで、人質を連れて行って、そこで解放されるシナリオ」

いくつかのチェックポイントを決め、誰がどのような形で、人質の健康をチェックして、また、ケガ人をどのような形で搬送するかということも想定して。

「強行突破の場合」

「死亡ゼロ」から、「全員死亡」という最悪のシナリオ」まで設定し、すべてを想定して搬送体勢を考えるんです。

どの病院に、どのように収容するか？

その病院の医療レベルは適切か？

輸血用の血液の、スクリーニングが、きちんとされているか？

その血液の、供給体制は大丈夫か？

すべてチェックしておく。

また、病院のどこで話をすれば、無線が通じるか？

巨大病院の構造はどうなっていて、死亡者、負傷者をどこに収容するか？  
車も、四駆車からバスまで10台確保してたんです。

ともかく、何が起こっても、医療面での対応ができるように、準備をしていたので  
す」

「でも、いざ、実際に強行突入が起こったら、大変なものでした。  
全くの不意打ちでしたから、完全なパニック状態でしたね。

どちらにしても、少なくとも30分前には、現地対策本部には知らされると思いまし  
た。

それが、本部のモニターで、突然ドカーン、ポカーン、黒煙モクモクでしょう。

マニュアル通りにはいかず、私と看護婦が乗るはずの車が来ない。

やっと、車に乗り込んだら、道が軍に閉鎖されて進まない。

歩道に乗り上げて、民家の庭を突っ切って、やっとMILITARY、軍病院にた  
どり着きました。

次々に運び込まれる人質の方の、全身状態から、傷の状態までチェックし、すべて  
無線で現地本部に連絡します。

そこから、日本の外務省、総理に連絡しました。

ここで、突入前のシュミレーションが、とても役に立ちました。

結局、日本の人質の方は全員無事でした。

軽症、無傷の方を日本大使館へ呼んで、全員健康チェックをし、入院した方は救急

室で、どんな治療を受けて、現在どんな状況なのか、レントゲン写真なども見直し、全部チェックしました。

すると、病院では問題なしと診断されたのに、実際は、骨折していた、なんていうのもありました。

負傷者には、全て診断・治療内容を書いた診断書を、我々で作って渡したり、ペル―国内の病院を受診する際は付き添って行ったり、退院した方には、傷の消毒をしたらしました。

精神科の先生が、数日来てくれたんですが、先生が帰った後、阪神大震災でもそうでしたが、精神的な問題は、災害後一週間以上経ってから来るんです。

パニックになる人がいて、夜遅く往診に行ったり、時間をとって話を聞いたりしました。

ほとんどの人質が帰国するまでいました。

現地対策本部にも外務省や、警察庁など50人以上が詰めていたんですが、その人たちも心身ともに調子がおかしくなる人がたくさんいます、そのケアもしていました」

「長かったので、いろいろな話があります。

いつまでも、セルパが動かないのですが、これは、金も無いし、ゲリラ活動をするために、ジャングルにこもっていた者が、突然、大使館にやって来て食料に恵まれた

ものだから、帰りたくなかったのですね。

セルパは、大使館に入ってから10キロ太ったから、このままコレステロールの高い物を食べさせて、心臓病で殺そうかって冗談になりました。

だんだん日本の人も飽きて来て、ジグソーパズルとかマージャンなどを差し入れでも、マージャンは500回やっていますので、飽きるわけです。

はじめのころは、ドンパチ何回かあったんで、隠れたりしていたのですが、後の方になるにしたがって、怖くなくなつて来たんですね。

強行突入の時も、誰かが「伏せろ！」と、言ったら、マージャンのパイを伏せさせて話があります」

「有名な話ですが、本当に床に伏せた人の、マージャンのパイを、他のメンバーに、見られてしまったんだそうです」

「あまりにも事態がこうちゃくしていたので、外務省から「國井先生、中に入って一発踊つて来てください」って、冗談を言われたのですが、行こうかなって思つたのですが、セルパに気に入られて、「おまえもう少しいろ！」って言われても困るしね」

「10時間じゃあ、すまないものね」

(おわり)